

# 佛教大学 総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2022.3 No.43

- 卷頭言
- 2021(令和3)年度 共同研究活動報告
- 2021(令和3)年度 新規共同研究紹介
- 2021(令和3)年度 共同研究総合評価の実施
- 佛教大学総合研究所紀要第29号 目次
- 烏報

## 私的学修からライフワーク研究へ

総合研究所 所長 野崎 敏郎

### 職業生活から芽生える興味関心

通学課程の学生たちは、所与の教育体系に則つて学士学位の取得を目指している。もちろん彼らは、高い学修意欲をもって学業に取りくんでいるが、それでもやはり、その学修活動には、多かれ少なかれ、《与えられた軌道》の上で学ぶという受動性が伴っている。これにたいして、大学院に進学する人たち、あるいは通信教育課程で学ぶ人たちの学修には、高い自主性ないし内発性が顕著に認められる。

なかでも、職業生活を営みながら学ぶ人たちには、職業経験や人生経験を踏まえ、それを高度に昇華させようとする意思が顕著に認められ、その真摯な学修態度は、教える側にいるわれわれをも裨益するところが大きい。また、そこからさらに本学の通信教育課程大学院で研鑽を積む人々もあり、さらにそのなかから、総合研究所特別研究員として、一層研究を深めている人々が輩出されている。それは、本学の長年にわたる教育活動の成果のひとつである。

### 私的興味から昇華される公的関心

このように、通信教育課程大学院において、また総合研究所特別研究員として研究活動を積んできた人々は、当初、郷土史にたいする関心や、歴史上の特定の人物にたいする関心から、あるいは

自分が取りくんでいる地域貢献活動を発展させたいという動機などから、学びはじめるケースが多いように見受けられる。そしてそこから、日本の歴史過程全体や、関心のある人物を取りまく社会経済状況や、地域貢献のために必要な諸資源といった《大状況》へと視野を拡げ、本格的な歴史研究や地域活性化研究へと踏みこんでいくというプロセスがあったようである。こうして、本学で学ぶなかで、もともと自分の私的興味であったことを公的関心へと昇華させ、自分が調べていることを大きな歴史・社会状況と関連づけることによって、郷土史家が歴史研究者へと、地域活動家が地域研究者へと成長を遂げることになる。

### 公的関心から醸成される学術的問題意識

私的学修が研究へと転ずるのはどういうときか、あるいは、私的学修者が研究者へと変わるのはどういうときかを考えてみると、それは、私的興味が公的関心へと転化し、しかもそれが学術的問題意識として當人に明確に自覚されたときだと思う。

私事になるが、筆者の父は、中学校の国語教師として長年教鞭を執るとともに、書道家としても活動した。そのなかで、漢字の字形にかんする問題意識が芽生えている。大正末期に生まれた彼は、戦前から戦後にかけて、教科書や新聞や各種の書物の字形が大きく変わるのを目にしており、とく

に、職業柄、教科書の字形と、それを手本とした字形教育（習字教育）に大きな関心をもつとともに、その時々の字形教育のありかたに疑問をもつようになった。

書道家として当然であるが、彼は、肉筆の字形と活字の字形との差異に関心をもった。そして、漢字史研究者たちの多くが、活字の字形にのみ着目して漢字の歴史を論じており、肉筆字形史つまり書道史を等閑視していることに、大きな疑問と不満を抱いた。この状況を開拓するためには、肉筆の字形が歴史的にどう変化してきたかを究明しなくてはならない。あらためていうまでもなく、肉筆の字形の歴史的研究は、活字のそれにくらべて、途方もなく大きな労力を要するものである。しかし、彼はこの難題に果敢に挑み、その調査結果を、島根県書道協会の雑誌に嘗々と連載しつづけた。並行して、漢字の歴史的変遷全体と、これまでの漢字史研究とを点検する作業もすすめており、大学院で学ぶということはしなかったが、独学で、めぼしい漢字史研究書を涉獵し、研究史を批判的に検討していく。

### 学術研究と人生との結合＝ライフワーク

こうして、私的学修として始まったことが、やがて学術研究へと発展し、その過程において、研鑽を積んだ人自身が成長していくと、その研究活動は、「ライフワーク」と特徴づけられる性格を帯びる。

父の場合、とりわけ退職前後から、自宅で開いていた書道塾の活動などを極力縮小し、漢字字形研究に全精力を振りむけ、そこに没入していく。日本国内の大学図書館等に所蔵されている稀覯書を仔細に点検するのみならず、中国にも渡航して、

現地の碑文などを調査しつづけた。肉筆の字形の素材としては、古い仏典等も有力なものであるため、筆者は、依頼されて、本学に所蔵されている仏典の写真版翻刻書のいくつかをコピーして送付した。また彼が必要とする本を購入して送付した。白内障を患っていた彼は、小さな文字を読むのが困難であるため、それらの資料の大半を、リース契約によって自宅に置いていた大型コピー機を用いて拡大コピーしたうえで読破した。

こうした長年にわたる嘗為は、『漢字字形の問題点——併『平22、常用漢字表』追加字批判——』（天来書院、2013年1月刊）として結実した。著者は87歳であった。この年の6月には、書道展に新作を出品したが、翌月他界した。

筆者には、この著作の詳細に立ちいって論評する能力がないが、これは、日本の書道文化の発展を期する強い課題意識と、将来世代にたいする教育者としての責任感から著された労作である。字形もまた重要な文化であること、その時々の便宜で恣意的に字形をいじってはならないこと、美しい字形を合理的な筆順で書くべきこと、そして漢字文化を国民全體で育むべきこと——こうした主張と願望が、行間から滲みでている。

この例をみると、職業的な関心から出発し、これを国民的課題という公的関心へと高め、さらに学術的問題意識を醸成させ、ほとんど余人のなしえない浩瀚な調査を敢行し、その研究成果を実らせることは、職業研究者でなくとも可能であることがわかる。こうしたライフワークが結実したということは、通信教育課程で学び、また総合研究所特別研究員として研鑽を積んでいる人々にとつても、みずからの研究活動の発展のために参考となると思う。

## ■常設研究

### 「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」（4年目）

研究代表 近藤 敏夫

#### 研究組織

##### <研究員>

近藤 敏夫 社会学部教授

原 清治 教育学部教授

小林 隆 教育学部教授

平田 豊誠 教育学部准教授

大藪 俊志 社会学部准教授

大東 貢生 社会学部准教授

水上 象吾 社会学部准教授

中島小乃美 保健医療技術学部教授

金 佑榮 社会学部講師

長光 太志 社会学部講師

施し、その一部はテープ起こしを済ませた。ただし、コロナ禍ということもあり、令和3年度末までにインタビューを実施できた方々は、佛教大学の退職者3名と南丹市のキーパーソン3名にとどまっている。インタビュー調査の承諾を得たものの、実施できないうまになっている。

第二に、これまで南丹市で実施してきた佛教大学の各種プログラムや学部学科の教育研究の成果をまとめるとした。それぞれの取組に関する印刷物やインターネット上の情報が散逸しているため、これらの資料や情報を収集する作業を実施中である。

##### <嘱託研究員>

関谷 龍子 佐久大学人間福祉学部准教授

公刊業績

湯川 宗紀 本学非常勤講師

大東貢生 2022.3「大学と地方自治体の連携について一括連携協定の成果と課題」『佛教大学総合研究所紀要第29号』

高御堂 厚 美山ふるさと株式会社常務取締役

#### 研究進捗状況

令和3年度の研究計画は、新型コロナの影響で南丹市における調査研究が困難であることが予測されたため、これまでの本学と南丹市との包括協定に基づく各種取組の成果をまとめ、あわせてその課題を検討することとした。

第一に、旧北桑田郡美山町との包括協定に至った経緯を含めて、佛教大学と地域の協定の在り方を振り返ることとした。すでに退職された本学の教職員および南丹市のキーパーソンにインタビューを実

総合研究所所長の野崎先生を交えて Zoom 研究会を実施した。中島研究員の報告について質疑応答を行った後、2023年3月に刊行予定の『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』の方針を検討し、各教員のテーマを紹介していただいた。なお報告書は大学に対する提言という位置づけもあることを加味して、必ずしも学術論文である必要はないとの方針を確認した。

大藪俊志 2022.3「大学における地域連携活動一現状と方向性」『佛教大学総合研究所紀要第29号』

#### 研究会等の開催状況

第7回 Zoom 報告会

日時：2022年3月29日 14:30～16:20

報告者：中島小乃美 研究員

タイトル：美山町をフィールドにした「ふれあい実習」における看護学生の学び

## ■プロジェクト研究

### 「社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究」（4年目）

研究代表 後藤 直

#### 研究組織

<研究員>	11月 シンポジウム総括
後藤 直 教育学部教授	12月 研究会（共同研究第一次まとめ）
堀家由紀代 教育学部准教授	1月 第一次まとめから4年間の総括へ
<嘱託研究員>	2月 "
山本 崇記 静岡大学人文社会科学部准教授	3月 研究会（共同研究活動総括）
藤井幸之助 同志社大学嘱託講師	であった。
高野 昭雄 大阪大谷大学教育学部教授	しかし、2021年1月以降の新型コロナ感染症対策
塚崎 昌之 本学非常勤講師	における国及び自治体の措置は
菅野 泰敏 京都市学校歴史博物館博物館主事	2021年1月14日～2月28日緊急事態宣言
島田 隆之 NPO 法人くらしネット21	4月12日～4月24日蔓延防止等重点措置
井川 勝 本学非常勤講師	4月25日～6月20日緊急事態宣言
本岡 拓哉 同志社大学人文科学研究所 専任教員 (助教)	6月21日～7月11日蔓延防止等重点措置
	8月2日～8月19日蔓延防止等重点措置
	8月20日～9月30日緊急事態宣言
	2022年1月27日～3月6日蔓延防止等重点措置

#### 研究進捗状況

共同研究の最終年度(2020年10月申請特別措置により4年目)にあたる2021年度だが、コロナ禍の影響で計画通りの研究は進められなかった。	そのような中、特別措置申請書提出以降取り組めた内容は、2020年度所報に記した第7回研究会(11/28)「不法なる空間にいきる」(本岡拓哉 嘱託研究員発表)、第2回緊急事態宣言下実施した調査用紙郵送による千本地域の実態調査及びその集約・分析のみである。
修正計画による当初の計画は、	新年度当初からの蔓延防止等重点措置・緊急事態宣言によって、4月・5月の計画を、約半年、先送りにする計画を再度立てざるを得なくなつた。5月予定の映画「東九条」の上映会を10月に計画し、それまでに衣笠開キ町の実態調査も実施して、千本
4月 調査結果の精査と必要に応じた補足調査	
5月 ドキュメンタリー映画「東九条」上映会	
6月 公開研究会の企画	
7月 公開研究会の準備	
8月 公開研究会開催	
9月 シンポジウムに向けた協議	
10月 シンポジウム開催	

地域の実態調査結果と共に分析を行い、報告を基にシンポジウムを同時に行うことを考えたが、諸対策の期間が長く、9月・10月予定の取組を進めることができなかつた。何とか年内に衣笠開キ町の実態調査の準備を整え、2022年1月8日に、衣笠開キ町住民へのヒアリング調査依頼の周知をチラシ配布によって行ったのだが、1月半ばよりオミクロン株による感染が拡大し、1月27日からの蔓延防止等重点措置(～3月6日)が適用されたので、実施をみあわせ、2回の延長を経て3月中旬まで実質的な活動はストップした。

そのような中、感染対策を取りつつ、衣笠開キ町住民の聞き取り調査を3月10日(木)、11日(金)、14日(月)、16日(水)、19日(土)と5日間で6名に実施することができた。対象の住民の中で、研究代表が交流のある20代から80代までの多世代にわたる女性4名、男性2名に対し実施した。内容も、千本地区とは違い、「在日コリアンとしてのアイデンティティ」や「在日コリアン」「開キ町砂防ダム内居住」ということに対する「差別体験」等にも触れ、時間をかけ、踏み込んだ中身の聞き取り調査となつた。年度をまたぐことになるが、さらに調査可能な住民に対して、追加実施していく予定を確認した。

そして、3月20日(日)10:00～12:00、リモート形式で、第8回研究会を開催した。内容は、当初5月、延期して10月に予定していた内容の一部で、

テーマ「東九条の歴史に学ぶ」

～自主映画「東九条」上映・講演会～

・映画製作の趣旨と経過

　　山内政夫氏(柳原銀行記念資料館)

・作品解説と東九条のまちづくりについて

　　稻野英明氏(柳原銀行記念資料館)

を実施し、戦後、東九条地域に形成された「4ヶ町」「40番地」の地域や人々の暮らし・仕事・子どもの教育等、またその後のまちづくりについて当時の映像や講義を通して深く学ぶことができた。

最終年度末を迎えて、修正計画に基づいた活動が進められなかつたことは、反省すべきなのだが、本プロジェクトのめざすより豊かな研究成果を得るために、直接的な対面形式での調査研究の取組を進めることが必要である。2022年3月末で、本学総合研究所共同研究期間は終了するが、当初の研究計画を完遂し、目的とする研究成果を上げるために、研究組織及び調査研究活動は継続する。2022年度の研究計画は以下のように立てている。

- 4月 年間研究計画の確認
  - 5月 公開研究会の企画
  - 6月 公開研究会の準備
  - 7月 第9回研究会(公開研究会)
  - 8月 池上町フィールドワーク
  - 9月 シンポジウムの準備
  - 10月 シンポジウムの開催
  - 11月 シンポジウムの総括
  - 12月 第10回研究会 研究活動のまとめ
  - 1月 研究活動報告書作成
  - 2月 "
  - 3月 " 発行
- 上の取組を推進し、両地域・コミュニティを一体的に捉えた「共生のまちづくり」に向けた、具体的な提案を行っていきたい。

## ■プロジェクト研究

### 「教師の指導力”気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合—」（2年目）

研究代表 松村 京子

#### 研究組織

<研究員>

松村 京子 教育学部教授  
山口 孝治 教育学部教授  
小林 隆 教育学部教授  
高見 仁志 教育学部教授  
二澤 善紀 教育学部准教授  
平田 豊誠 教育学部准教授  
波多野達二 教育学部准教授  
青砥 弘幸 教育学部准教授

<嘱託研究員>

Lerkkanen, Marja-Kristiina  
　　ユハスキヨ大学（フィンランド）・  
　　教育・心理学部・教授  
渡辺 恭良 理化学研究所 生命機能科学研究センター  
　　健康・病態科学研究チーム・チーリーカー  
水野 敬 理化学研究所 生命機能科学研究センター  
　　健康・病態科学研究チーム・上級研究員  
渡辺 恭介 理化学研究所 生命機能科学研究センター  
　　脳コネクティビティシング研究チーム・研究員

<学術研究員>

西田美由紀 教育学研究科 博士後期課程

#### 研究進捗状況

今年度は関連する論文が国際誌に3編、国内誌に1編が出版された。主な概要は以下の通りである。

Teachers' visual processing of children's off-task behaviors in class: A comparison between teachers and student teachers.

PLOS ONE 16(11), 2021: e0259410.  
<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0259410>  
<https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0259410>

教師は、児童の発言や行動、授業の進捗状況、教育目的などに瞬時に応応する、レスポンシブ・ティーチングが必要である。教師は、教室で児童を観察することによって児童の学習状況を把握し、それに基づいて瞬時に指導を決定する。授業中には、教師の指示通りに行動する児童としない児童がいるため、教師は児童の行動を敏感に察知し、適切に対応する必要がある。熟練した教師は、クラス全体に視線を行き渡らせ、授業外行動の児童を発見することができる。では、教師の視覚処理能力、気づきの能力はどのように発達するのであろうか。この過程を明らかにすることは、経験豊富な教師にとっても、教師を目指す学生にとっても重要である。そこで、本研究は、視線分析を通して、教師と学生の間で、授業中の視覚処理や授業外行動への気づきの能力に違いがあるかどうかを調査することを目的とした。

教師76名、学生147名を対象として、ビデオを教師目線で視聴することを依頼し、アイトラッカーで視線計測を行った。ビデオでは、授業中に授業外行動をとる児童が、学級担任から授業への参加を促され

ていた。ビデオ視聴後、視聴者に、授業外行動をとり、教師に注意された児童を識別できるかどうか尋ねた。その結果、教師は学生に比べ、授業中に授業外行動をとる児童を注視する頻度が多く、それに気づく率も高いことがわかった。この結果は、教師と学生の間で、授業中の関連情報を視覚的に処理する経験が異なることに起因していると思われる。このように、視線の直接測定による教員の視覚処理に関する知見は、教員の能力開発に貢献することができると考える。

Development of the START Program for Academic Readiness and Its Impact on Behavioral Self-regulation in Japanese Kindergarten Gardeners.

Early Childhood Education Journal, 2021  
<https://doi.org/10.1007/s10643-021-01213-1>

この研究は子どもの基礎的な能力を向上させることによる教師の能力の補充を示したものである。集中力の欠如、聞き取りができない、教師の指導が通らないという「小1 プロブレム」は、広く知られている。この問題を防ぐために子どもの実行機能と自己制御能力を高める Social Thinking & Academic Readiness (START) プログラムを開発した。プログラムが実施された実験群には79人の幼稚園児、標準的実践群には70人の幼稚園児が参加した。介入の前後に、両群の子どもたちが自己制御能力と実行機能が測定された。自己制御能力については、グループ（実験群・標準的実践群）と時間（介入前・介入後）の間で交互作用が有意で、実験群が標準実践群よりも介入効果が大きいことが明らかになった。さらに、STARTプログラムを実施した教師は、子どもの集中力、聞く力、自己制御能力の向上を報告している。

Gaze analysis of pianists' sight-reading: Comparison between expert pianists and students training to be pianists.

Music & Science 4, 1– 13, 2021

DOI: 10.1177/20592043211061106

<https://journals.sagepub.com/doi/pdf/10.1177/20592043211061106>

この研究はピアノの教師と生徒の読譜の能力の違いを視線分析で明らかにしたものである。

楽譜を見てピアノを演奏する時、指で奏でる音符よりも楽譜の次の音符を注視しているという Eye-Hand Spanという現象が知られている。教師は学生よりもEye-Hand Spanが有意に大きかった。

また、教師は楽譜の難解な部分では視線停留回数が増加し、気づいて演奏していることが明らかになった。

#### 研究会等の開催状況

日 時：2022年2月10日(木)13:00～14:50

形 式：Zoomによるオンライン開催

参加者：10名

研究会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、研究員、嘱託研究員等を対象としてオンライン開催とした。

研究員の自己紹介の後、松村京子研究代表がプロジェクト概要と今までの研究成果について発表を行った。研究成果の「教師の授業中の注意配分力を視線分析で捉えた研究」をもとに、水野 敬 嘱託研究員が「脳科学と教育～注意配分力と学習意欲の神経基盤～」について、発表を行った。発表後には、教育実践学の研究者である、研究員の先生方から各教科との関連性などについて質疑応答がなされ、活発な議論が行われた。そして、研究最終年度に向けての研究計画について検討を行った。

## ■プロジェクト研究

### 「Withコロナ時代の看護学生に対するVR（仮想現実）臨床実習法の開発およびキャリアデザインの動向調査とその支援」（1年目）

研究代表 安居 幸一郎

#### 研究組織

＜研究員＞

安居幸一郎 保健医療技術学部教授

坪山 直生 保健医療技術学部教授

河田 光博 保健医療技術学部教授

漆葉 成彦 保健医療技術学部教授

浜崎 優子 保健医療技術学部教授

植村小夜子 保健医療技術学部教授

蔽下 八重 保健医療技術学部教授

中島小乃美 保健医療技術学部教授

田尻 后子 保健医療技術学部教授

濱吉 美穂 保健医療技術学部准教授

田野中恭子 保健医療技術学部准教授

長谷川由香 保健医療技術学部准教授

阿部あかね 保健医療技術学部准教授

鬼頭 泰子 保健医療技術学部准教授

岡田 朱民 保健医療技術学部講師

高岡 寿江 保健医療技術学部講師

太田 晓子 保健医療技術学部講師

早瀬 麻子 保健医療技術学部講師

阿部 慶美 保健医療技術学部講師

手島 弘恵 保健医療技術学部助教

緒方 靖恵 保健医療技術学部助教

石堂たまき 保健医療技術学部助教

木下 純子 保健医療技術学部助教

柏原 寛美 保健医療技術学部助教

＜嘱託研究員＞

矢野 朋子 大手前大学国際看護学部助教

森本 昌史 京都府立医科大学看護学科教授

#### 研究進捗状況

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、看護学生は医療機関での臨床実習が制限され、将来のキャリアについて不安を抱いている。

本研究は、Withコロナ時代の看護教育を充実させため、下記の2課題に取り組んでいる。

① VR（Virtual Reality；仮想現実）／AR（Augmented Reality；拡張現実）／MR（Mixed Reality；複合現実）技術を活用して、「リモートVR臨床看護実習システム」を構築する。

VR/AR/MRで遠隔実習に参加する学生が、自宅や大学に居ながら、医療現場に立ち会っているかのようなヴァーチャルな臨床体験ができる、そのような次世代型の看護実習法を開発する。

② COVID-19が看護学生の価値観とキャリアデザインに与える影響を調査し、学生のキャリアデザインを実現できるための支援法について検討する。（以下、それぞれ【課題①】と【課題②】と表記する。）

新型コロナウイルスを前に立ちすくむのではなく、逆にそれを奇貨として前進するための研究である。

#### 【課題①】の進捗状況：

1. 患者ケア教材のVRコンテンツ作製

看護実習用のVRコンテンツを作製するに当り、既存の360度VRコンテンツ制作・表示技術では制約が多い。そこで、360度動画、360度静止画、解説（説明）の音声、およびテキストを統合的に表示できる技術を導入した。そして、片麻痺がある患者が病室で食事をする場面をひとつの事例にして、看護師として何を観察し、どこに注意を向け、どのような配慮と行動をする必要があるか、を学べるVRコンテンツを作製した。以下に、その1場面を示す。



2. 拡張現実（AR）によるシミュレーションを用いたマルチモーダルケアコミュニケーション教育の効果検証

国産科学技術振興機構（JST）が推進するCREST（戦略的創造研究推進事業研究）で進行中のプロジェクト「優しい介護インタラクションの計算的・脳科学的解明」（代表：京都大学 中澤篤志）に参画した。この研究プロジェクトは、「優しい介護」ユニバニチュードのケア技術を、ウェアラブルセンサーなどで取得、定量化し、優しいケアスキルがどのような要素から構成されるのかを計算機的に解析し、介護スキルの学習システムの開発につなげることを目的としている。このプロジェクトのテーマのひとつである「拡張現実によるシミュレーションを用

いたマルチモーダルケアコミュニケーション教育の効果検証」（代表：独立行政法人国立病院機構東京医療センター 本田美和子）について、本研究員と看護科学生が本学二条キャンパスで検証実験を行った。なお、この研究は本学の「人を対象とする研究倫理審査」で承認を得ている（2021-27-A）。

以下に検証実験中の写真を示す。学生が装着しているARゴーグルには、コンピューターグラフィック（CG）で作製された患者の表情が模擬患者用人形の顔面上に投影されている。学生は表情の変化を見ながら、ユニバニチュードのケア技術を実践している。



#### 【課題②】の進捗状況：

コロナ禍の最中に卒業した2020年度看護学科卒業生に対して卒後進路に関するアンケート調査を行った。

#### 研究会等の開催状況

本研究員ならびにCREST学外研究者と本学および京都大学で研究打ち合わせを適宜行った。下は、そのうちの1回で、ユニバニチュードの創始者イヴ・ジネスト氏（中央）を囲んだ写真である。



総合研究所では共同研究に対する点検・評価を目的として「佛教大学共同研究評価ボード規程」に基づき進捗評価および総合評価を実施しており、2021（令和3）年度は2件の総合評価を実施した。

総合評価は、本学の今後の研究活動の活性化、ならびに研究成果の発信、活用、社会への還元等に資することを目的としている。今年度対象となった共同研究は、次の2件であった。

①プロジェクト研究「大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究」

研究代表：大東 貢生（社会学部准教授）

②「東アジアにおけるケアと共生」

研究代表：朴 光駿（社会福祉学部教授）

評価ボードは、評価ボード長となる副学長、研究推進機構長（今年度は対象となる共同研究のうち構成員となっている研究については、担当外とした）、学長の指名する評価協力者（若干名）および研究推進部長をもって構成され、評価協力者として、学外研究者1名、学内研究者2名に依頼した。

評価ボード（会議）では、匿名性を重視して評価を行うため、評価協力者から提出された共同研究評価意見書は氏名を伏せた状態で資料とし、意見書に記載された内容について、評価項目に沿って、意見交換が行われ評価が決定された。それを取り纏める形で、評価ボード長により「共同研究 総合評価」が作成された。総合評価は、総合研究所運営会議な

らびに研究推進機構会議に報告がなされ、研究代表へ通知された。

評価ボードによる総合評価の実施スケジュール

10月21日 各研究代表へ共同研究成果報告書の作成を依頼

11月26日 研究代表より共同研究成果報告書の提出

12月1日 評価協力者へ共同研究評価意見書の作成を依頼

1月17日 評価協力者より共同研究評価意見書の提出

1月25日 評価ボード（会議）を開催し、総合評価結果を決定

2月16日 「共同研究 総合評価」を評価ボード長により作成、確定

2月17日 総合研究所運営会議へ総合評価結果を報告

3月9日 研究推進機構会議へ総合評価結果を報告

3月18日 各研究代表へ総合評価結果を通知

目 次

〈研究ノート〉

本居宣長の哲学的思考と仏教教義新しい宣長像の構築を目指して

清田 政秋

『八幡愚童訓』諸本研究史再考

筒井 大祐

〈書評〉

五味文彦著『文学で読む日本の歴史近世社会篇』元和偃武 | 綱吉・吉宗

飯田 隆夫

〈論文〉

大学と地方自治体の連携について包括連携協定の成果と課題

大東 貢生

大学における地域連携活動現状と方向性

大藪 俊志

在日朝鮮人の移動と定着京都市楽只学区を事例に

高野 昭雄

コミュニティキャンパスにおけるアクティブ・ラーニングの成果と持続性の課題カリキュラムマネジメントされた大学授業でのフィールドワークの取り組み

水上 象吾

早池峰大僧神楽の師弟構造について

中嶋奈津子

〈研究ノート〉

少年非行に関する学外授業の実施と学習機会について

作田誠一郎

## 彙 報

### ■2021（令和3）年度 総合研究所組織

所 長	野崎 敏郎
研究推進機構	作田誠一郎* 細田 典明 坂井 健 李 昇暉 藤岡 熱
会議委員	安藤 潤 伊部 恭子 利木佐起子 中嶋 力都 森 智女 内田 仁
	大西 伸江**
運営会議委員	野崎 敏郎* 細田 典明 稲永 知世 鈴木 文子 相馬 伸一 越智 淳子 米林 寿美 内田 仁**
紀要編集委員	野崎 敏郎* 田山 令史 稲永 知世 鈴木 文子 相馬 伸一 越智 淳子 米林 寿美 内田 仁**
事 務 局	米林 寿美

(\*は委員長) (\*\*はオブザーバー)

### ■2021（令和3）年度 共同研究

No	研究名	代表名	研究期間(年度)
1	(常設研究) 南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究	近藤 敏夫	2018～2021 *1
2	(プロジェクト研究) 社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究	後藤 直	2018～2021 *2
3	(プロジェクト研究) 教師の指導力“気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合—	松村 京子	2020～2022
4	(プロジェクト研究) Withコロナ時代の看護学生に対するVR(仮想現実)臨床実習法の開発およびキャリアデザインの動向調査とその支援	安居幸一郎	2021～2023

\*1 2020年度 評価ボード（進捗評価）の結果を踏まえ、審議の結果、研究期間を2021年度までとした

\*2 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、研究計画を再考し特別措置により研究期間を延長

### ■2021（令和3）年度 総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対し、総合研究所特別研究員規程に基づき特別研究員を募集し、15名を任用した（任用期間は2021年4月～2022年3月）。

また、総合研究所特別研究員制度の課題について総合研究所運営会議にて協議し、「総合研究所特別研究員規程」を改正し、今年度より登録料（施設使用料含む）48,000円を納入するものとした（ただし、科学研究費補助金等の競争的資金を受給している期間は、登録料の納入を免除する）。

氏名	研究テーマ
肖 越	初期浄土經典成立史の基礎研究—人間学としての浄土教—
近藤 伸介	ショーペンハウアーの意志とアーラヤ識—現象世界の背後に存在基盤—
佐伯 慶海	常啼菩薩求法譚の研究
清田 政秋	本居宣長と仏教思想との関連に関する研究
田中 裕成	新出梵文ボタラ宮俱舍頌写本の研究
吹田 隆徳	浄土教の起源と発展
田中 夕子	平安時代の仏像と信仰に関する心性史—『土右記』『水左記』『後二条師通記』を中心として—
林 竹人	絵師高田敬輔が描く浄土の世界—「選択集十六章之図」及び「無量寿經曼荼羅」を中心として—
濱田 幸子	『伊曾保物語』の江戸時代における受容
筒井 大祐	『八幡愚童訓』の生成と展開に関する基礎的研究
河本 信雄	田中久重が佐賀藩において携わった、アームストロング砲模造の実態解明
中嶋 奈津子	神楽の継承と伝播の研究—なぜ、早池峰神楽は継承できたのか—
池田 晶	近世寺社と祭礼史の研究
飯田 隆夫	相模国大山寺縁起と木太刀奉納習俗に関する研究
山口 瑞穂	日本国内の宗教運動における終末論的救済觀の比較研究

#### 特別研究員の研究成果

河本信雄 単著「日本の伝記 知のバイオニアシリーズ」『田中久重と技術』（玉川大学出版部）2021年10月15日刊行

共著「田中久重と技術」項担当執筆『洋学史研究事典』洋学史学会監修（思文閣出版）2021年10月刊行

山口瑞穂 単著『近現代日本とエホバの証人—その歴史的展開』（法藏館）2022年4月8日刊行

## ■活動記録【2021（令和3）年4月～2022（令和4）年3月】

4月 14日 第1回研究推進機構会議  
23日 第1回総合研究所運営会議  
28日 第2回研究推進機構会議  
5月 14日 総合研究所特別研究員懇談会（Google Meet 使用）  
19日 第3回研究推進機構会議  
6月 2日 第4回研究推進機構会議  
23日 第5回研究推進機構会議  
7月 9日 第2回総合研究所運営会議  
14日 第6回研究推進機構会議  
9月 9日 第3回総合研究所運営会議  
15日 第7回研究推進機構会議  
10月 14日 第4回総合研究所運営会議  
20日 第8回研究推進機構会議  
11月 4日 第5回総合研究所運営会議  
10日 第9回研究推進機構会議  
12月 8日 第10回研究推進機構会議  
9日 第6回総合研究所運営会議  
1月 13日 第7回総合研究所運営会議  
26日 第11回研究推進機構会議  
2月 9日 第12回研究推進機構会議（中止）  
10日 「教師の指導力”気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合  
—」研究会（Zoomによるリモート開催）  
17日 第8回総合研究所運営会議  
3月 9日 第13回研究推進機構会議  
20日 「社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究」研究会（Zoomによる  
リモート開催）  
29日 「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」Zoom報告会

## ■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第43号をお届けします。依然としてコロナ禍にありますが、各共同研究班は、その時々の状況下で可能な活動を見極め、柔軟に対応して、成果を挙げています。また、今年度から特別研究員制度が改正され、新制度の下で、各特別研究員が、堅実な研究活動を進めています。フィールド調査を必要とする研究課題が多く、調査にさいして、いかにして適切なリスク・マネジメントをするのかが、重要な検討課題となっています。（N）

佛教大学総合研究所報 第43号

発行 2022(令和4)年3月25日

発行所 佛教大学総合研究所

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL:075-491-2141(代表)

FAX:075-495-2151(直通)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/>